

女王国の南の狗奴国を見つけた!!

会員番号 10333 神尾忠和

はじめに 中国語と韓国語が融和した漢文、日本語と韓国語が融和した漢文で、韓国語の音訓を借りて表現した漢文を筆者は融和文字と呼んでいます。邪馬壹国も狗奴国も解説できました。ただし、日韓・韓日辞典が必要です。

1 女王国は八女市祈禱院字白石である

女王国は邪馬壹国と表現してある。「邪」の発音は中国語で「ジャ、シャ、ヤ」であり、韓国語では「サ」である。「壹」は中国語で「イチ、イツ、イン」と発音し、韓国語では「イル、ハツ、ハン」である。

邪馬壹国を中国語で発音すると、シャマイチ国である。シャマ (s y a m a) は音韻の変化でシャーマン (s y a m a n) となり、シャーマン 1 番・シャーマンキングというのが邪馬壹国の意味であることが分かるのである。

邪馬壹国を韓国語で発音するとサマハン国となる。韓国語での邪馬 (s a m a) はツングース・マンシュ語で「祈祷師」のことを「サマ (s a m a)」と発音するので、これを語源として「邪馬」と表現しているのである。ハンは「一番、始、頭、長、王」という意味があるので、邪馬壹国 (サマハン国) とは「シャーマン王国。祈祷師王国。」と言っていることが分かるのである。

邪馬壹国は中国語で「ヤメイン国」と発音できる。『魏志』倭人伝の本文中に「其の餘の旁国」とあり、その中に「邪馬国」があり、この国名の意味は「祈祷師国」である。その祈祷師が卑弥呼であり、卑弥呼はこの邪馬国の「女王」なのである。倭国三十五ヶ国ものの王から共立されて「連合国」の王となった卑弥呼は、自分の邪馬国の建物を連合国の朝廷としても使い、国名を邪馬 (s a m a ・ 祈祷師) 壹 (h a n ・ 王) 国と称したのである。それは、馬韓国が五十余の部族国家だったのを、伯濟国が取りまとめて連合国の百濟国に発展させたのと同様である。

邪馬は中国語で「ヤメ」と発音し、壹は中国語で「イン」と発音する。「ヤメ」は福岡県に八女という市があり、八女市祈禱院字白石の地名がある。八女は「邪馬・s a m a ・ 祈祷師」の音訓であり、院は中国語で「壹」の発音で意味は「一番・王」であるから、まさに八女 (邪馬) 市祈禱 (邪馬) 院 (壹・王) が邪馬壹国の住所なのである。字白石の白は百と同音であるから、白石は百個の墓石のことである。卑弥呼が死んだときに「殉葬する者、奴婢百余人」とあるので、ここに塚がある事が分かるのである。

2 男王国は菊池川流域の玉名市である

八女市の南に狗奴国がある。馬韓には狗盧国があり、弁韓には狗邪国がある。これは吏読文字であるのでどちらも「カラ国」と発音する。「カラ」とは「大沼」という意

味です。各集落の役場は、川から堤を築き、小川として水を引き、大沼を作り、その付近に集落の役場を作った。その集落とその役場の名前を「カラ」と称したのである。この「カラ」を吏読文字(融和文字)で加羅・駕洛・加耶・狗邪・官国などと表現してある。

カラの「カ」の語源は、大檀君王儉が三神・五帝を定めた際に五大臣として「トツカ・ケガ・ソガ・マルカ・シンカ」を組織し、戦い時には元帥となり、平時には国務大臣となる役職者である。後に「カ」は「王」の意味となった。『三国史記』に「王逢県一云皆伯」とある。皆伯は「カマ」と発音し、「カ」は「王や貴族」を称する名詞で、「マ」は「逢う。順序のはじめ。はたがしら」の意味です。

カラの「ラ」の語源は、渡し場を「ララ」といったもので、のちに「ナラ」とも言い「ナ」だけ「ラ」だけでもその意となったのです。韓国の古地名の末尾に「那・羅・奴・壤・浪・婁・邪」があるのは「ナ・ラ」の音訳であり、「川・池・沼・原・集落・京・国」などは「ナ・ラ」の意識なのです。

狗奴国の官に狗古智卑狗がいる。古智はコチ・クチと発音し、韓国の地名に骨(コチ)、只(クチ)、串(コチ)、古次(クチ)などと使われている。骨品制度の血統や家系を意味しており、王族が居住する所の地名として使われている。そこに宗主の居所があるのである。狗古智はククチ・クコチと読む。韓国語で「菊」のことをクク(kuk)と発音し、「池」のことを「チ・モツ」と発音するので菊池市が「王の居所」といえるのである。

狗奴国はクナ国・カラ国と発音し「王国」の意味である。『広辞苑』で「王座」を引くと「王の座席。玉座。王位」とあるので、熊本の玉名市は「クナ国・カラ国」と発音し「王国」という意味の「狗奴国」であると言えるのである。

邪馬壹国の八女市の南にある玉名市・菊池市が狗奴国である。

3 卑弥弓呼は朱蒙(善射者)の意識である

狗奴国の男王は卑弥弓呼とある。卑弥は漢音でヒミと発音する。韓国語にヒミハダという語があり、漢字の「稀微」のことである(ハダは接尾辞)。稀微には「ぼんやりしている。はっきりしない。ほの暗い。かすかに聞こえる」という意味がある。『老子』には「之を聴けども聞こえず、名づけて希という。之を捕ふれども得ず、名づけて微という。」とある。卑弥弓呼の呼は韓国語でホ(ho)と発音し「豪」と同音である。豪には「強い。荒々しくて勇ましい。また、そのような人。すぐれる。能力や才知などが人よりまさっている。また、そのような人。おさ。かしら。率いる人。長。その道の達人。財産や勢力のある人」という意味があるので、卑弥弓呼とは「はっきりしないが、かすかに聞こえる声では弓の達人である(稀微な弓の達人)。｣と言っていることになるのである。これは漢人の商人が朝鮮半島の南端まで来て「海の向こうに何がある?」と質問した時に、韓国人商人や漁民が「海の彼方の絶域に、島あり山あり人が居ることは知っているが疎遠である」と言い、続けて「はっきりしないが、勢いが強く盛んな女王が居る。これまたはっきりしないが、弓の達人と言われている

男王が居る。」旨の返事をしたものと思えるのである。

弓の達人については「ツングース族の扶余国に卓琳莽阿（チュリルムオル）という名の若者がいる」と伝説にある。「扶余国の王河伯の女が、日神に感じて身籠り生まれた子が朱蒙である。朱蒙は成長すると同輩たちの中で、弓を射ることの巧みさは並ぶものが居なかった。」とある。その者の名は、三国史記高句麗本紀東明聖王条には鄒牟（チュム）とあり、三国志魏書高句麗伝では朱蒙（チュムル）とある。朱蒙は扶余語で「善射者」の称である。先学の説では、善射者は「弓の名人」のことで、満州ツングース語で卓琳莽阿（チュリルムオル）と言い、卓と朱の音は近く、琳は歯舌の余韻であり、莽阿の二字は蒙に近いと言われている。

広開土王の碑文には鄒牟と記してあり、文武王の詔には中牟（チュム）と書いてあるからこれは朝鮮語である。朱蒙はチュムルと読むので満州語（濊語・扶余語）である。

『魏志』倭人伝には卓琳莽阿の音は伝わらず、善射者・弓の名人という意識が伝わり、卑弥弓呼という「類い稀なる弓の達人」という名称が付けられたものである。朝鮮半島からの渡来人が住み着いたり、商船で往来したりして各民族の交流や接触が増え、邪馬国の女王のように扶余国の祈祷や呪術を身に着けたり、狗奴国の男王のように朱蒙のような弓の名人と言われるような人々が出現したのである。

『続日本紀』には、朱蒙・中牟とはせずに「都慕」とある。韓国語で都はソウルの発音のほかにスウト（s u t o）がある。また、韓国語で思慕をサモハダというので（ハダは接尾辞）、慕はモ（m o）の発音であるから、「都慕」は「朱蒙」の呉音と同じスモ（s u m o）なのである。

4 熊襲の語源は阿蘇山である

狗奴国は玉名市である。市内を流れる菊池川をさかのぼると、狗古智卑狗の居る菊池市がある。ここに隈府という地名がある。隈の意味は「くま。すみ。山や水辺がはいりこんで奥まった所。」であり、府は「みやこ。政府のある町」の意味であるから、奥まった所の狗古智（王の居所・王の城）に卑狗（稀なる王）が統括する役所があった事を意味する地名なのである。

菊池市のさらに奥まった所に、大きな噴火口をともなった活火山がある。噴火口は危険を承知で遠くから見てみると、くぼんでへこんでおり、地層や岩石の隙間から火や煙や蒸気を噴きあげている光景は昔も今も変わらないものであろう。「隈」の意味と同じものに「阿」があり、それは「くま。川や山の曲がって入り込んだ所。」である。「くま」の同音異義語に「熊」があり、解字によると「能+火」で「肥えて脂肪ののったくまの肉がよくもえることを示す。昔、火の精である獣と考えられた。」とあり、また熊熊（ユウユウ）とは「火の盛んにもえるさま。」の意味である。噴火は数か月続いて数年休まるような活動をするので、再噴火の時には「死んだものが、また息をふきかえた。」と思うもので、これを漢字で表現すると「蘇・穌・噴」がある。阿蘇も熊噴も意味は同じ「はいりこんで奥まったところにある大きなくぼみがあ

り、火の精である熊が息を吹き出す」である。いきなり火山の噴火に襲われる状態が何回も重なることを「熊襲」といったのである。いつしか熊噴（クマホン）が熊本（クマホン）と表現されるようになったものであり、熊噴（熊本）・阿蘇が熊襲の語源なのである。卑弥呼（女王）と紛争を繰り返していたころの、気の抜けない状態が後世も続いていたと思えるのである。

5 根子の語源は聖旨（コンス）である

阿蘇山の外輪山の内側に根子岳がある。多くの案内状では猫岳と添え書きしてあるが、根子はコンスと発音するものである。

奈良の三輪神社は、三輪山自体が神であり、つい最近までなんぴとといえども、この山林に足を踏み入れることは許されていなかった。ここの祭主は大田田根子であるから、根子岳の根子と同じである。「大」はデ（d e）と発音するので達と同音であり、達は韓国語で「山」の意味がある。「田田」はタッタ（t a t t a）と発音し韓国語で「戸を閉める。蓋をする。閉鎖する。」という意味であるから、大田田根子とは「山を閉鎖するという天の意向。神語。」と言っているのである。

熊本の阿蘇神社の祭神は健甞竜命である。健の意味は「元気があふれて力が強い。王。大」であり、甞には「うねる山脈」の意味があるので、根子岳とは「力強い岩の層の山脈にするという天の意向。神語。」と考えられるのである。

根子岳の南方の宮崎県に日向という地名がある。韓国語で「日」はイル（i l）と発音し、数字の「一」と同音であり、「一」はハン（h a n）とも発音するから「王」の意味にもなるのである。「向」の発音はヒヤーン（h y a n g）であり「郷」と同音であるから、日向は「王郷」と言っていることがわかるのである。『記紀』の編纂者は、そのことを知っていたために神武天皇が、日向国の高千穂宮を出、瀬戸内海を経て紀伊国に上陸したと記したのである。

根子岳と日向を直線で地図上に線を引くと、その延長線上に太宰府・博多・志賀島が結ばれるのである。かつての奴国である。朝鮮半島からの渡来人たちは、光明の本源の地をたずねながら南方・東方へ向かってきて、阿蘇山に行きつき、その山地の樹林帯を光明神の宿る所（聖樹・コンス）と信じたのである。韓国ではこのような樹林に神壇を設け、祭主を立てている。その祭主を天から降臨した天神（ハンニム）・檀君と呼んでいたのである。この祭主の御言葉をも「聖旨・コンス」といったのである。

聖旨は、石上神宮に現存する七支刀の銘文にある「奇生聖■故、為倭王旨造」の「聖■」の事であることがわかり「世子奇生の天の意向ゆえに、倭王の心の向かうところの為に造る」という意味であることがわかるのである。

これらの聖旨（コンス）をわかりやすく表現しているのが『三国遺事』の駕洛国記である。それには「・・・どこからともなく人の声らしいものが聞こえて来たが、その姿は隠したままであった。（神の声）私が今おるのは何という所じゃ。（村長）亀旨と申します。（神の声）私はこの地に新しい国を造り、その国王となるようにと天上の神から命じられて、今ここへ降ってきたのじゃ。・・・一筋の紫色の縄が天から垂

れ下がってきて地面に着いた。そこには金の合子があり、中には黄金の卵が六つあり、この卵から駕洛国の六王が生まれその一人が首露王なのです・・・」とある。「天から垂れ下がって」とは空授と言ひ、韓国語では「空授」をコンス（天の意向）と発音する。亀の呉音はコンであるから亀旨はコンスと発音するのである。また、百濟記にある「木羅斤資」の斤資も韓国語でコンス（k o n s u）と発音する。木羅はナムラ（n a m u r a）と発音し、ナムラダ（n a m u r a d a）とは韓国語で「叱る。叱責」の意味である（d aは接尾辞）から、木羅斤資は「叱責聖旨」となり、「天の意向の叱責」という意味であることがわかるのである。

聖旨は、韓国語でコンス（k o n n s u）とは別にピス（p i s u）の発音がある。ピスを漢字で表現したものに「日子」と「飛鳥」がある。綏靖天皇の兄に「日子八井命・神八井耳命」とある。日子（ピス）は聖旨と同意であり、八（ヤ）は弥（数の多いこと）であり、井は市井・郷井（人の集まる所）で、耳は韓国語でクイ（k w i）と発音し、「貴」と同音である。八井は大八島・大八洲のことで日本国の古称であるから「天の意向の日本国の尊」という意味になるのである。

朝鮮半島からの渡来人たちは、河内盆地の南東側から太陽が昇るのを見て奈良盆地へ入り、その方向に高取山を見つけた。韓国語で「高取」はコス（k o s u）と発音するので、コンス（k o n s u）と同音とみなしたのである。ここを源流とする川に渡来人たちは故郷をしのいで松花江と呼んだのである。韓国語で松は「アス」であり、花は「クリ」であるから、「ピス（飛鳥）から流れる松花（アスカ）川」なのである。飛鳥と書いてアスカとは中国語でも韓国語でも読まないものである。強いて言えば倭人語であろうか。意味は「天の意向のアスカ川」である。

九州にも畿内にも樹林神檀があり、そこから聖旨（コンス・根子・ピス・日子）「天の意向・神語」を得ていたのである。

6 卑弥弓呼は久住山（九重山）の神として今も留まっているのである

卑弥弓呼は、狗奴国の王であり「類稀なる弓の達人」の意味である。これは扶余国・高句麗国の朱蒙と同じ表現であるから、朝鮮半島からの渡来人が尊敬して付けた名称である。朱蒙の末裔と自称する渡来人たちであるから、馬に乗ることはたけていたはずである。九州からは小型馬の化石が出土しているから、菊池市から馬に乗り阿蘇山へ行く工程は容易であったはずである。

玉名市から東へ六十キロメートルで阿蘇山の根子岳がある。根子岳から北へ二十五キロメートルで九重山（久住山）がある。久住山から西に六十キロメートルで八女市がある。八女市から南へ二十五キロメートルで玉名市があるのである。この範囲内には矢部川・菊池川・大野川・玖珠川が多くの支流を伴って流れているのである。この地域を支配したのが狗奴国の男王であれば、島原湾・別府湾・臼杵湾・佐伯湾を手中に治め管理することが出来たはずである。

久住の「久」と九重の「九」は、漢音でキュウ・呉音でクであり、この音は「宮」の発音と同音なのである。宮の意味は「天子、神仙などの居所」である。「住」の意

味は「じっとたって動かない。じっとひと所にとまる。じっととどまって動かない者」である。それが男王の卑弥弓呼である。「弓」は久・九・宮と同音であるから、「類稀なる弓の達人」の居所がこの久住山なのである。

以上のように漢字表現の古文献の名詞は、韓国語の音や訓を用いて解説することが出来る事を確認した。

参考文献

日韓・韓日小辞典	白帝社
漢字でわかる韓国語入門	祥伝社
日本語の源流をさかのぼる	徳間書店
韓国古地名の謎	學生社
シャーマニズム	中公新書
古代の東アジアと日本	教育社
朝鮮上古史	緑蔭書房
日本の古代1 倭人の登場	中央文庫